

### 「白雪姫」

白雪姫がまるで生きてるように生きいきとしていて、ほおはまだ美しく赤いので、こびとたちは、

「この人を、あの黒い土の中にうめることはできない」といいました。

こびとたちは、外から白雪姫を見ることができるよう、ガラスの棺をつくらせ、白雪姫をその中に寝かせました。そして棺に金文字で、名前と、それが王女であることを書きつけました。

『語るためのグリム童話3』小澤俊夫監訳 小峰書店

文字が金です。土の黒、ガラスの透明との対比が鮮やかですね。

### 「黄金の鳥」

むかし、あるところにひとりの王さまがいた。王さまの宮殿のまわりには、広い庭園があり、黄金のりんごがなる木があった。りんごが実ると数がかぞえられたが、次の朝になると、いつもひとつなくなっていた。そこで王さまは、毎晩、木の下に見張りをおくことにした。(略)

三番めの王子の番になった。王子は、黄金のりんごの木の下で、用心ぶかく見張っていた。時計が十二時を打ったとき、一羽の鳥がとんできた。その鳥は、体じゅう黄金でできていた。

鳥がくちばしでりんごをつつこうとしたとき、王子は鳥をめぐけて矢を射た。鳥は、あつというまにとびさった。その矢は鳥にはあたらなかったが、黄金の羽が一枚落ちてきた。

『語るためのグリム童話3』小澤俊夫監訳 小峰書店

りんごと鳥が金です。このように、植物も動物も鉱物の金でできています。

### 「千枚皮」

むかし、あるところに、ひとりの王さまがありました。その王さまのおきさきは、金色の髪をしていて、たいへん美しく、これほど美しいかたはこの世にふたりとないと思われるほどでした。ところがあるとき、おきさきが重い病気になりました。そして、自分の命のおわりを感じる

と、おきさきは王さまをおよびにっていました。

「わたくしが死んだあと、もういちど結婚なさるなら、わたくしと同じくらい美しく、わたくしと同じように金色の髪をした人とでなければ、結婚してはいけません。どうぞそれだけは約束してください」

『語るためのグリム童話4』小澤俊夫監訳 小峰書店

この金色の髪は、もちろん鉱物の金ではなくて、金髪です。おきさきのたぐいまれな美しさのひとつとして金髪をあげています。これは民族的なこともあるのかもしれませんが。日本では、近代までは黒髪が美人の象徴でもありました。